

ライティング・ワークショップの秘密 — 選択理論を通してライティング・ワークショップを眺めてみる — 影山陽子

要旨

ライティング・ワークショップは、高い教育効果を持った書きの実践的な活動だといわれているが、その実態は伝わりにくく、また、なぜ高い教育効果があるのかを経験知以外で示すことが難しい。

本研究ノートでは、ライティング・ワークショップとはどんな実践であるのか、なぜ学習者は書くことが好きになるのか、その秘密を探ることにつとめる。

考察の結果、ライティング・ワークショップは、意図せず、「選択理論」という心理学の理論の知見が用いられた、継続的な学習活動である可能性が高く、ライティング・ワークショップにおいては、学習者が、仲間と教師を「上質世界」という自分の理想の世界の中に存在させ、自分の書きたいものを書き上げた状態（「上質世界」）を目指して、それぞれが最適な選択をし続けることが可能であるため、学習者がその実践を好きになり、自律的な学び手に育っていくのではないかと考えられた。

キーワード ライティング・ワークショップ、選択理論、人間関係、好き、「上質世界」

1. はじめに

1. 1 ライティング・ワークショップとは？

ライティング・ワークショップとは「米国において 1980 年代から普及し始めた『書く』ことのきわめて効果的な教え方・学び方である（フレッチャー&ポータルピ 2007）」。

ライティング・ワークショップにおける授業の流れは、通常の一斉授業とは少し異なる。

従来の一斉授業に近い時間が最初の 10-15 分間に設けられる。これは「ミニ・レッスン」と呼ばれる時間で、教室全体が一つとなり、教師が学習者にとって有用な「書き」の知識やスキルを紹介する。たとえば、書くことがないと感じられた時にどうすればいいか、アイデアを絞るにはどうすればいいか、効果的な書き出しとしてはどんなものがあるか等の「書き」に関する困難への対処から、主語と述語の呼応、話し言葉と書き言葉、文末表現の統一について等の文や文章作成の決まりについての知識等を幅広く扱う。

その後は学習者個別の時間となる。それぞれが自由に、書きたいものを書きたいように書く時間となる。事前に行ったミニ・レッスンと関連していることを書くのではない（もちろん関連内容を書いてもよい、そこは学習者に任せられる）。また、書いたものおよび、書きに関する取り組みは、各人によって記録され、作品と取り組みの記録はポートフォリオのように保存される。また、このひたすら書く時間には、教師による個別指導（カンファランス）も行われる。最後の約 10 分間程度に、また教室は一つとなり、誰かの作品を（それが書きの途中であっても）発表し、それを皆で共有し、気づきや内省を得る。作品に関して、皆で質問をしたり、意見を交換したりする。

このように全体（知識やスキルの獲得）→個別（実践）→全体（共有と内省）という流れとなっている。

また、フレッチャー&ポータルピ（2007）はライティング・ワークショップを考える上で参考となる例としてスキーのクラスを挙げて、以下のように説明している。

スキーのレッスンが始まると、早々に子どもたちはスキーをハの字に開いて滑れるようになり、お昼には中級者用のコースを滑り降りてきました。子どもたちがあっという間にスキーヤーに変身したことに驚きました。子どもたちは、どのようにしてスキーヤーに変わったのでしょうか。このときのことを振り返ってスキーの指導者のことを思い起こすと、強く印象に残っていることが四つあります。

①指導者自身がスキーヤーです。指導者は、なんともかっこいいスキーウェアを身に着け、スキー仲間の言葉で話して、自分たちがもっているスキーへの情熱を余すところなく伝えていました。

②指導者たちは、スキーについて「説明する」よりも実際にスキーの「練習をする」ほうがよいと考えていました。スキーについての講義、ビデオ、シミュレーションはせずに、子どもたちにスキー靴の止め具を締めてあげるとすぐにスキーの練習に入りました。

③子どもたちがたくさん転ぶと分かっていました。一人の指導者が、ニヤッと笑って言った言葉は印象深いものでした。

「今日は何度も転ぶことになるよ。誰でも転ぶんだ。今晚は打ち身で痛いと思うよ。でもね、今日の終わりまでにはスキーが滑れるようになっていると保証できるよ」

④ほめ方がうまく、ほめることで次の成長へとつなげていました。

「滑れてるじゃない。本当にスキーをするのは初めてなの？信じられないよ！まるでプロのスキーヤーみたいだよ」

（ラルフ・フレッチャー&ジョアン・ポータルピ 2007）

スキーの例でわかるように、ライティング・ワークショップにおいて、教師は教えるというよりも、「書く」ことが好きなエキスパートとして、教室に存在し、「実践を通して学び続ける」学習者たちをほめ、励まし、育てていく。

また、ライティング・ワークショップに不可欠な要素として、スキーレッスンとの類比を参考にしつつ、私は次の4つを挙げたいと思う。

①「教師が実践者」として共にあること ②実践を行う「仲間」が存在していること、②実践をするうえで「自由と選択の保証」がされていること（たとえば、「題材」や書き方などの選択が学び手側にあるということ）、そして④実践を「楽しむ」ことが推奨されていることである。

これら4つの要素は、ライティング・ワークショップを実践している教員数名と、ライティング・ワークショップの実践報告について協議する過程で抽出したものである。

①「教師が実践者」として共にあることはスキーマのインストラクターの例が示すとおりよきロールモデルとなること、および、実践者としての生きた知識を学習者に届ける効果が期待される。また②実践を行う「仲間」が存在していることは上述のサイクルの中の共有と内省を可能にし、③実践をするうえで「自由と選択の保証」がされていることは学習者が好きなことを自由に書く際に必要な要素であり、さらに、選択権が与えられていることは内省による学びを実践に生かす土壌をつくる。④実践を「楽しむ」ことが推奨されていることは、実践の無理のない継続を支援するものである。このような場づくりがライティング・ワークショップではなされる。

また、現在、日本で出版されているライティング・ワークショップの実践に関する書籍は、前述のフレッチャー&ポータルピ(2007)と岩瀬他(2008)の2冊であるが、それらのタイトルと副題は、次のとおりである。

タイトル：ライティング・ワークショップ

副題：「書く」ことが好きになる教え方・学び方 (フレッチャー & ポータルピ 2007)

タイトル：作家の時間

副題：「書く」ことが好きになる教え方・学び方【実践編】

帯(表)：子どもたちが本物の「作家」になれる！書くことが大好きになる画期的な学び方

(岩瀬他 2008)

早く書きたい！

これらを見ると、学習者(子どもたち)が「書く」ことが好きになるということが、ライティング・ワークショップの特色であることがわかる。「好きこそものの上手なれ」という諺にもあるように、学習者とその活動を「好き」になることからもたらされる教育効果は、教室に立つ者として、実感できるものの、教育実践を報告する際には、無視されることが多い。「好き」や「満足」といった個人的な感情は、数量的に測ったり示したりすることが難しいからである。また、なんらかの方法で情意的な変化を示すことができたとしても、それらと「書く」力との関連を示すことは困難だともいえる。

しかしながら、ライティング・ワークショップがもたらすこの効果、つまり、学習者が書くことを好きになることはライティング・ワークショップの核心ともいえる点であるため、本稿では無視せず、取り上げていく。

1. 2 本稿の目的：ライティング・ワークショップの秘密を探る

本研究ノートの目的は、ライティング・ワークショップはこれまでの教育実践と何が異なるのか、つまり、ライティング・ワークショップの秘密について説明することである。

ライティング・ワークショップとはどのような授業なのか、なぜライティング・ワークショップを実践する中で学習者は書くことを好きになるのか。

ライティング・ワークショップについて聞いた教員の頭には多くの疑問がよぎることだろう。本稿では、その問いに答えてみたいと思う。

筆者は 2009 年から、大学の学部留学生授業において、ライティング・ワークショップに準じた書きの実践を行っている(影山 2010)。1 節で述べたライティング・ワークショップとの大きな違いは、大学生の書く文章は長いと、共有の時間を短時間内に、教室で行うことは不可能で、それらは自宅で行うこと(つまり、仲間が書いた作文は自宅で読んでくれることが前提となっている)、また、実際に「書く」時間もコースが進むにつれて、教室の中から自宅に移っていくことである。しかし、ライティング・ワークショップに必要な 4 つの要素、①「教師が実践者」として共にあること ②実践を行う「仲間」が存在していること、③実践をするうえで「自由と選択の保証」がされていること、④実践を「楽しむ」ことが推奨されていることは満たされている。

この実践を通して、教師としての筆者は、学習者の生き活きとした「書き」の実態や、一人ひとりが持つ個性などを存分に知ることができ、教育効果の高い「書き」の実践を行っていると自負している。また、学習者が書くことを楽しんでいること、好きでいることも感じられている。しかし、この活動について他者に説明することの難しさも感じてきた。

そのような時に出会ったのが、次章で取り上げる「選択理論」であった。この心理学は、従来の心理学とは異なったアプローチで、私達が抱える問題を説明する。そこで重要視されているのは、諸問題を単に原因分析したり、解決に導くというのではなく、身近にある人間関係をよくするという視点である。

ライティング・ワークショップを、選択理論を通して見てみたら、何かが見えてくるかもしれない、直感的に感ずるものがあった。

それは私自身の作文教育に関する興味関心および実践に基づく。

筆者が作文教育に関わり始めたのは、今から約 17 年前の日本語学校の教員時代であった。その頃、作文の授業は苦痛であった。書くという苦役を学習者に課し、書きあがった物に対して、添削という多大なエネルギーを使うものの、それが有効に活用されている様子は見られなかった。時に、添削によって学習者を傷付け、あるいは、添削したものがそのままゴミ箱に直行することさえあった。

その問題を解決したいと考え、大学院に進学し、出会ったのが、ピア・レスポンスという協働学習方法であった。これは、お互いの作文を良くするという目的を持って、書き手である学生同士が作文に関する話し合いを行うというもので、筆者の問題に解決の手掛かりを与える部分があった。また、ピア・レスポンスと教師フィードバックを連続して行った教室活動において、筆者自身の研究では、教師フィードバックよりもピア・レスポンスのほうが、作文の内容に関わる推敲を促した(影山 2001)にも関わらず、同じ手順でおこなった Pulus(1999)では、教師フィードバックのほうがピア・レスポンスよりも、作文の内容に関わる推敲を促したという反対の結果が出ていた。そして、それらの要因として、教室内の人間関係、学習者が仲間のことをどう考えているか、教師のことをどう考えているか、が関わっているという考察が行われた。

このように、作文学習において、人間関係は活用できる余地が多分にあり、かつ、その関係性において異なった影響を与えることがわかっていた。

その意味で、人間関係を良くするという視点を持った心理学である選択理論の知見を作文教育に当てはめてみるのも一つの手ではないかと感じられた。ライティング・ワークショップの教室では、約 17 年前の日本語学校の教室で見られた光景はなく、学習者は、書

かされるのではなく、書きたいものを書いている。ライティング・ワークショップの教室では従来とは異なった人間関係が存在するのではないか、選択理論を通して、それを考えてみたいと思った。

これまでの先行研究では、ライティング・ワークショップを理論立てて説明したものではなく、もちろん、そこに選択理論を適用したものはない。

この試みは、萌芽的な考察であるため、研究ノートとして扱いたいと思う。

2. 選択理論

2. 1 選択理論とは何か

選択理論とは、米国の医学博士であるウィリアム・グラッサー (William Glasser) が提唱した心理学である。彼の言葉を借りれば、選択理論はこれまでの心理学とは一線を画しており、これまでの心理学は「外的コントロール心理学」であり、選択理論は「内的コントロール心理学」と表現されている。(ウィリアム・グラッサー 2000)

選択理論が目指すのは、人間関係である。それは、多くの不幸な人々の原因が人間関係に由来しているからである。お金があっても、地位があっても不幸な人がいて、その人たちは、自分の不幸の原因は他人にあると信じている。そのため、エネルギーを使って他人を変えようと試みるが、うまくいかないばかりか、より人間関係を損ない、状況を悪くさせている。

選択理論の核心は、他人をコントロールすることをやめ、自分を適切にコントロールする(最善な選択をする)ことにある。

また、選択理論には4つの基本概念がある。「5つの基本的欲求」「上質世界」「全行動」「創造性」である。以下、選択理論を説明したホームページ(選択理論.jp)を参考に、これら4つの基本概念を説明する。

2. 1. 1 「5つの基本的欲求」

「5つの基本的欲求」では「生存の欲求」、「愛・所属の欲求」、「力の欲求」「自由の欲求」「楽しみの欲求」であるこの中で最も満たすのが難しいのが、「愛・所属の欲求」であると言われている。それは、他のものは一人でも満たすことが可能であるが、この「愛・所属の欲求」だけは一人では満たすことができないものだからである。また、「力の欲求」にも注意が必要だ。多くの人(特に男性)が、この欲求の使い方を誤って人間関係を壊してしまう。

2. 1. 2 「上質世界」

「上質世界」は上述した「5つの基本的欲求」を最も満たすイメージ写真であり、私たちは、この「上質世界」にあるイメージに自分を近づけていくために、その時最善と思った行動を取る。また、私たちは「上質世界」にあるものには強い関心を持つが、「上質世界」にあまり関係のないものに対しては関心を払わない。「上質世界」にも3つの要素があり、「一緒にいたい人」「最も所有したい・経験したいと思うもの」「行動の多くを支配している考え・信条」がそれに当たる。

また、人は外的コントロールである「致命的な 7 つの習慣」を用いる人を「上質世界」から外してしまう。「致命的な 7 つの習慣」とは批判する、責める、罰する、脅す、文句を言う、ガミガミ言う、目先の褒美で釣る、の 7 つである。

一方、この「致命的な 7 つの習慣」をやめ、それに代わるものとして「身につけたい 7 つの習慣」として、傾聴する、支援する、励ます、尊敬する、信頼する、受容する、意見の違いを交渉する、の 7 つがあげられている。

上質世界に入るものは全て、自分にとって肯定的なものであり、たとえば、配偶者や最も親しい友人、好きな食べ物や欲しいもの、行きたい場所や趣味、宗教や哲学などが入る。しかし、上質世界は固定したものではなく、常に作り変えられていく。そのため、たとえば夫婦は結婚当初は通常お互いを上質世界に入れているが、お互いに外的コントロールを使い続けると、徐々に上質世界からお互いを取り除いてしまい、顔を見るのも苦痛な関係になることもある。

2. 1. 3 「全行動」

選択理論では、人間の行動を「全行動」という概念で説明する。「全行動」は次の 4 つの行動、「行為（歩く、話す、食べるなどの動作）」「思考（考える、思い出す、想像するなど、頭を働かせること）」「感情（喜怒哀楽といった感情）」「生理反応（発汗、心拍、あくび、呼吸、内臓の働きなど）」を指す。私たちの行動はこれらの 4 つが絡み合って構成される。4 つのうち、私たちが自らの意思で直接コントロールできるのは、「行為」と「思考」だけである。

2. 1. 4 「創造性」

選択理論では、創造性とは整理された行動と求めているものが得られないときに、新たなアイデアを生み出すために、脳が情報を再整理している状態のことであり、どんな人にも備わっている能力だとしている。創造性が発揮されるメカニズムとして、ある情報が脳に入った場合、その情報は個々の善悪や好き嫌いなどの基準によって、「快適感情・積極的価値」を伴うか、「苦痛感情・否定的価値」を伴うものとして知覚される。「快適感情・積極的価値」を伴う場合、脳はどのようにそれを手に入れられるかということや、どうしたらもっとうまくできるかということを考え始める。一方、「苦痛感情・否定的価値」を伴う場合は、問題を解決したり、直面したくない状況を避けるために何ができるかを考えたりし始める。この創造システムには二面性があり、プラス面としてはより高いレベルで欲求を満たしたり、複数の欲求を同時に満たそうとしたりする。マイナス面としては、思い通りにいかなかった場合に、落ち込んだり、暴飲暴食をして憂さを晴らしたりする。これらの憂さ晴らしは、傍からみると無意味に見えても、本人にとってはストレス解消を狙った最善の行動の場合がある。

3. 選択理論とライティング・ワークショップ

2章で説明した選択理論の 4 つの基本概念のうち、主に「上質世界」に焦点を当て、ライティング・ワークショップという実践を分析・考察していきたいと思う。

まず、ライティング・ワークショップの流れにおいて、最初の部分（初めの 5-10 分）に行うミニ・レッスンについて考える。この時間は従来の教師主導の一斉授業に最も近い部分とされている。ミニ・レッスンを行う際の注意事項として、フレッチャー&ポータルピ（2007）は次のように述べている。

従来型の教え方に近い時間はミニ・レッスンで終わりです。このミニ・レッスンは、ワークショップの残りの時間の進め方を方向づけるものではありません。ミニ・レッスンは大切なスキル（たとえば効果的な動詞がもたらす効果）を教える時間ではありますが、残りの 40 分間はその時に学習したスキルの練習時間ではありません。

いったんミニ・レッスンが終わると、子どもたちはそれぞれの作品の続きに戻ります。それは、子どもたちが自分で決めた目的や狙いが大切にされる時間です。子どもたちがすぐに使うかどうかわからないスキルや効果的な書き方を、ミニ・レッスンで教えることに違和感を覚える教師もいるかもしれません。しかし、ミニ・レッスンでの学びが書き手としての子どもたちの視野を広げて、それが子どもたちの作品に生きてくるのです。

選択理論を理解してから、ミニ・レッスンを眺めると、従来の教え方に最も近い時間であっても、教師のコントロールのもと学習者が知識を練習したり、身につけたりする時間は設けられないことがわかる。ライティング・ワークショップは学習者が自分自身で、選択するその余地が最大限に保証されているのである。しかしながら、未熟な書き手は、作文を書き始める際に、何を題材として選んだらいいのか、どのような書き方が最適なのか、わからないことが多い。それゆえ、学習者の視野を広げ、選択できる力をつけるためにミニ・レッスンが行われる。教師は常に学習者の選択を支援する側に立つ。教師が「致命的な 7 つの習慣」を使って、学習者に書かせるのではなく、「身につけたい 7 つの習慣」を使って、書き手自身が何かを選び取ることを支援し、励まし続ける。ミニ・レッスンは従来の教え方に似ているように見えても、その位置づけが異なるのである。

ミニ・レッスンに続く「書く時間」についても、フレッチャー&ポータルピ（2007）では以下のような注意がされている。

ワークショップの大半は、子どもたちが実際に書く時間です。この時間が教師の与えた課題を終わらせる時間にならないように注意してください。教師が課した作文も「書く」学習活動であり。それなりの価値があるかもしれませんが、ライティング・ワークショップでの「書く」学習活動とは異質のものなのです。

また、「書く時間」の学習者の様子について以下のような記述が、岩瀬他（2008）にある。

机を自由にしてもいいようにしてから、活発に話す子どもも多く見られるようになりました。自由に移動できることで話しやすい友達と隣同士になることができ、こちらが意図しない自由な会話が生まれるようになりました。

活発にかわされる会話は一見雑談のように見えても、次の瞬間には、何か閃いたかのように鉛筆を走らせる姿をしばしば見かけました。静かに取り組んでいる子どももいますが、そうした自由に話す雰囲気のある教室のなかでも周りの声がじゃまになっていないようで、集中して書く姿が見られました。

このような教室の様子は、ピア・レスポンスを行う教室ではしばしばみられる。しかしながら、そのためにはある程度の時間が必要なことも筆者の経験でわかっている。岩瀬他（2008）からは、学習者自身がライティング・ワークショップという活動を続ける中で、適切な行動を選択できるようになっていく様子が観察される。また、選択理論が最も重要視する人間関係が豊かに育まれている様子も見受けられる。同じ岩瀬他（2008）から、共有の時間の様子も見てみたい。

最後の 10 分間は「共有の時間」と言って、作家の椅子^{*注1}に座って作品を読み上げる時間です。初めは、子どもたちが「えっ、座ってもいいの？」と戸惑っている様子でしたが、回を重ねるにつれ、人気の椅子に変わっていききました。

子どもたちは、この共有の時間を本当に楽しみにしています。子どもたちの話を聞いていると、「僕も、私も、いつかは作家の椅子で読みたい」という思いが共通してあるようです。

ここで見られる光景は、選択理論でいう「上質世界」を体現したものではないかと私は考えている。「作家の椅子に座って自分の作品を読み上げたい」という「上質世界」のイメージが学習者の中に芽生え、そして、そこに一緒にいてほしい人物として、教師や仲間を入れることに成功した場合、学習者は「書く時間」を自分の目標達成のために、自分をコントロールしながら、つまり自律的に使うことができるようになっていく。また、そのような「上質世界」を築き上げることに成功した場合、学習者は書くことを重要な行動であると位置づけ、また、書くという活動および授業実践に好意を持つ状態になっていると考えられる。

4. まとめ

本研究ノートの目的は、ライティング・ワークショップはこれまでの教育実践と何が異なるのか、つまり、ライティング・ワークショップの秘密について選択理論を通じて説明することであった。

ライティング・ワークショップとはどのような授業なのか、なぜライティング・ワークショップは楽しいのか。学習者は書くことを好きになるのか。

その答えを私なりにまとめたい。

ライティング・ワークショップは、意図せず自然に、選択理論の知見が用いられた、学習者と教師による継続的な学習活動である可能性が高い。

学習者は、自分の書きたいものを書き上げた状態、それを皆に発表（あるいは提出）している状態を「上質世界」において、そこに近づくために、それぞれが最適な選択をし続ける。

また、書き手としての自分に「自由と選択の保証」と「楽しむ」ことを与えてくれる「仲間」と「実践者としての教師」を、学習者が彼らの「上質世界」におく可能性も高い。

つまり、学習者の「上質世界」には、「仲間」や「実践者としての教師」が存在し、ともに「楽しみ」ながら「自由と選択の保証」のもとで、書きたいものを書きあげた自分自身の姿があるのではないか。このような「上質世界」に導かれて、学習者は自分自身をコントロールし、自律的な書き手に育っていく、そういった継続的な学習活動である可能性が高い。

最後に、先にライティング・ワークショップでは、意図せず自然に選択理論が用いられていると述べた点について、少し説明をしたい。

ウィリアム・グラッサー（2000）に、このような記述がある。「ハーブ・ケレハー（Hearb Kelleher）はサウスウェスト航空の卓越した最高責任者であった。彼は会社経営に選択理論を実践していたのである。彼は恐らくそのことには気づいていない。」

このように、選択理論は、実は私達の日常生活の中で自然に使われていることがある。

ライティング・ワークショップが実践されている教室では、自然発生的に選択理論が用いられた状況が起こっているのではないかと私は考えている。教師と学生という関係性においては、外的コントロールを使用することが一般的、常識的だと思われる（ウィリアム・グラッサー 2001）が、この実践においては、従来の常識の型を破ることで、そういったことが起きているのではないかと思う。

従来までの方法でうまくいかなかったのであれば、ライティング・ワークショップのようなオルタナティブを試してみる価値があると考える教師も増えてきている。

昨今、大学生が幼稚になったと言われて久しい。私も同様の感想を持っている。そのため、現在の大学の教育現場では、外的コントロールがより強く用いられようとしている。出席チェックの IT 化や、課題提出の管理等、IT 技術の進化に伴い、外的コントロールがより精緻に強固に行われている。しかし、そこで本当の学びは育つのだろうか。最も創造性を必要とされる「書くこと」のクラスにおいて、学生たちが発揮している創造性が、「どうやって効率よく、とりあえずこの苦しみから解放されるか」といった方向に傾きつつあることに、私は危機感を抱いている。

ライティング・ワークショップという実践が、大学のアカデミック・ライティングの教室でも用いられれば、学生たちが書くことを好きになり、自律的な学習者として立ちあられるようになるのではないという可能性を感じている。

今後の課題としては、ライティング・ワークショップのような実践を、どのような物差しで測ることが適切か、また、「好き」や「楽しみ」といった感情と学びとの関連をどのように明示的に示すことができるのか、教育効果測定に論点を移して、考察していくことが必要だろう。

（影山陽子 かげやまようこ・日本女子体育大学・kageyama@jwcpe.ac.jp）

注

1. 「作家の椅子」というのは、ライティング・ワークショップで用いられる工夫の一つであり、「書き手」である子どもたちが自分の作品をクラス全体に読みあげるときに座るといふ目的で置かれた椅子を指す。

参考文献

岩瀬さやか・岩瀬直樹・甲斐崎博史・金子文昭・菊地博之・本田陽志恵・吉田政晃・小坂敦子・吉田新一郎 (2008) 『作家の時間 「書く」ことが好きになる教え方・学び方【実践編】』新評論

ウィリアム・グラッサー (2000) / 柿谷正期訳 『グラッサー博士の選択理論 幸せな人間関係を築くために』アチーブメント出版

ウィリアム・グラッサー (2001) / 柿谷正期訳 『あなたの子供が学校生活で必ず成功する法—なぜ、この学校には落ちこぼれが一人もないのか—』アチーブメント出版

ウィリアム・グラッサー カーリー・グラッサー (2003) / 柿谷正期訳 『結婚の謎』アチーブメント出版

影山陽子 (2001) 「上級学習者による推敲活動の実態—ピア・レスポンスと教師フィードバック—」お茶の水女子大学人文科学紀要第 54 巻, pp. 107-119

影山陽子 (2010) 「大学学部留学生授業におけるライティング・ワークショップの試み」アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 2, pp. 41-55

ラルフ・フレッチャー&ジョアン・ポータルピ (2007) / 小坂敦子・吉田新一郎訳 『ライティング・ワークショップ「書く」ことが好きになる教え方・学び方』新評論

Pulus, T. M. (1999) The effect of Peer and Teacher Feedback on student Writing. *Journal of Second Language Writing*, 8. (3), 265-289

選択理論.jp <http://www.choicetheory.jp> (2011年5月23日アクセス)